

海を越えて「桜」がつなぐ日本の心

大前 忍

現在の勤務校等
岐阜県大垣市立北小学校在外での勤務校／帰国年月
プラハ日本人学校／2019年帰国

校内に52本の自慢の桜がある小学校の児童と海外の日本人学校・補習授業校の児童が、桜をテーマに相互交流した。外国にも自分と同じ日本人の小学生がいると知って海外への興味が生まれた児童の素朴な疑問が、世界をつなぐ交流事業に発展した。



実践・活動の内容

校内に52本の桜の木がある小学校に帰任して小3を担当した。小3は地域の桜について学び、「桜守活動」として水やりなどの管理をする学年で、その活動中に児童から「日本人学校にも桜あった？」と聞かれた。赴任していたプラハ日本人学校にはさくらんぼのなる桜の木がありみんなで食べていた、学校に隣接しているアパートの庭にはとてもきれいな八重桜があって記念撮影をした、などの話をしたら、子どもたちが「私たちの桜のことを外国に紹介したい」と言い出した。

子どもたちは英語でやりとりするのでは自分の意思が伝わらない、自分たちの言葉でしっかり伝えたいという希望を持っていた。「先生は外国で、日本語で教えていたんでしょ、外国にも日本の子どもがいるんだよね」と日本人学校の子どもに興味を持ったので、日本人学校との交流を発案した。

まず前任校のプラハ日本人学校に打診したが、それだけではなくもっとたくさんの学校にも知らせたいと考えたので、各国の日本人学校のホームページや個人的な伝手をたどってメールを送った。交流相手を探す際には学校の後押しが必要だったので、校長からの手紙を添えるようにした。

返事があったのは8校、その後子どもたち同士の相互交流まで発展したのは、プラハ日本人学校（チェコ）、バルセロナ日本人学校（スペイン）、ハンブルグ日本人学校（ドイツ）の3校だった。

まず、こちらから自校の桜の話題と、「桜を知っているか」「日本の桜をどう思っているか」についてのメールを送った。先方から返事があったら、さらにやり取りを続けた。話題は桜からどんどん広がり、「日本では今何をしていますか？」などのやり取りに発展した。桜の写真が送られてくることもあった。

同時に、自分たちの桜への愛着をさらに高めるために、地域ボランティアや桜の手入れ職人の講話をしていただいた。



外国に住む同年代の子どもたちとの交流とあって、桜だけではなく日常生活についての話題は子どもたちの関心が高かった。メールでのやりとりに子どもたちはとても興奮していた。特に、「桜ではないけれども、現地の人が桜のように愛でている花」としてオーストラリアのジャガランダという木の写真を送られたときは、海の向こうの学校でも、私たちと同じように調べ学習をして送ってくれたんだと感じて、児童も私もとても嬉しかった。違う国に住む日本人同士が、日本語で双方の土地の文化について語り合うことができることの価値を実感した。

身近な存在である桜がこれだけの大きなプロジェクトになったことに私自身が興奮し、交流への意欲がさらに高まった。子どもたちの活動への追究心もどんどん深まり、休み時間にも交流相手に手紙を書いたり、届いた手紙をもとに、まとめ活動を工夫したりするなど、活動が発展していくことに楽しさを感じていたようだ。保護者からも、子どもたちが自慢気に桜活動について話をしていると聞いた。

さらに外国のことを知りたい、英語を使って交流できるようになりたいという意欲が高まり、中には、英語の学習をはじめた児童もいた。子どもたちが外国を自分たちに引き寄せ、外国に向けて目を開いた活動になったと感じている。

国際理解教育だから英語となりがちだが、それ以前に想いを伝えること、その必死さのほう更重要である。これは私自身が海外で感じたことでもあった。

しかし、顔を合わせて直接交流や打ち合わせができないので、どうしても無機質になってしまう。プライバシーの問題から写真を送りあうことも難しい。そこで、互いの子どもが手書きした手紙をPDFに変換して、直筆の手紙を送りあった。また、保護者の承諾が得られたプラハ日本人学校の子どもたちとは、子どもたちの写真の交流が実現した。

時差があるので、メールのやりとりにはどうしてもタイミングにズレが生じてしまう。欲しいタイミングでうまくメールが届かないこともあった。

また、双方ともに小3であり日本語の語彙や慣れの問題で、意味がとりにくい文面の手紙が届く場合もあり、そのときは聞き直したり、先生の補足が必要になってしまうという難しさもあった。

国際理解教育は学校で必須の仕事ではなく、プラスでやっているという位置づけだった。校長は応援してくれたが、それ以外の職務がおろそかにならないように留意した。同僚からは、「趣味の仕事」「桜の学習を外国まで広げる必要はあるの?」という声もあった。また、時差の関係でやり取りのメールは朝確認することになるのだが、「朝からメールの確認をしている」と言われることもあった。

その後、私が他校に異動したこともあり、児童の交流を次年度に引き継げなかった。交流した児童は下の学年の子たちにも広げたいのでどんどん話し、下級生も期待していたので実現にいたらなかったのは残念だった。

時差が大きいこと、やりとりに時間を要することなどの問題があるので、活動を長期的に計画する必要があったことが課題だった。自分がコーディネーターとなって毎年実施するなら可能だが、それでは私しか実施できないプロジェクトになってしまい、長期的な継続にはつながらない。

日本のことをもっと知りたいと思っている日本人学校の子どもたちにとっても、国内の学校との交流は意味があると思う。今後は、さらに日本人学校・補習授業校、現地校、そ

して日本の3校でのスクランブル交流ができれば面白いと思っている。日本人学校の子どもの強みは、現地と日本のことを知っていて、多少なりとも現地の言葉が理解できることなので、コーディネーター的役割を果たすことができる。実際には時差や言語の問題もあって教員の負担も大きくて非常に難しいとは思いますが、もしオンライン開催が実現できれば3者すべてにメリットがあると思う。



実践に至った経緯と提言

初任の頃から在外校勤務にあこがれていたが、応募の内規があつてなかなかチャンスがなかった。3度目の挑戦でようやく実現。もともとヨーロッパへのあこがれがあり、プラハに決まってとても嬉しかった。車を使わないと決めてトラムで3年間通勤した。理由は現地の生活になじむためと、チェコ語に触れるため。チェコ語は難しい言語だが、ヨガ教室や絵画教室、語学学校などで徐々にわかるようになっていくのが嬉しかった。

プラハ日本人学校は約100名のアットホームな学校だった。小3・5・1の担任を持ち、交流担当コーディネーターとして、全学年分の現地校交流などの企画を担当した。通訳と一緒に交渉に行き、新規開拓はもちろん、交流が中断していたところと再開したりした。多くの学校を見学したので、いま日本の教育現場にいながら「外国の学校では」という違った視点からモノが言えるのは、この時の知見によるところが大きい。「うちの子は、みんなができることができない」と子どもの発達に悩む保護者に対して、「その子の才能がどこで開くかはわからない。今はそっとしておいてよい」と、チェコの例を引いてアドバイスすることもある。

小1の学級は、日本での教育経験が全くない児童や、日本語を話さない児童など多種多様だった。その中で「あいうえお」から教えていくことの難しさを痛感した。日本の小1ならばあたりまえに触れている50音を全く知らず、「あ」が書けない、発音できない子もいた。国語の教科書にローマ字でルビをふり、保護者と協力しながら日本語の練習を進めた。しかし、塾や通信講座もない、授業ではじめて学ぶことがすべてという児童への授業は感動があり、教えることがとても楽しかった。

3年後、海外赴任前にいた学校に帰任したので、「外国から帰ってきた先生」として注目を浴びた。子どもたちから質問攻めにされ、何事も「日本人学校ではどうだった？」と尋ねられた。それが桜の実践につながった。

その頃、私の中には「帰ってきてから何もできていない」というジレンマがあった。悩んで先輩の帰国教師にも相談していた。子どもたちの言葉から桜の交流企画を発案して進めながら、「これで私の経験を活かせる」と思った。このほかにも、音楽科で扱う「山のポルカ」はチェコ民謡なので、チェコのダンスで踊ったりした。また、「世界がもし100人の村だったら」をテーマにワークショップをつくって好評をばくし、同僚の中には取り組んだ先生もいた。

チェコでの経験は、帰国後の教育活動に非常に影響を与えた。考え方、働き方、生き方すらも大きく変えたと思っている。

日本人の同調主義、目立ちたがらないところには以前から違和感を持っていたが、帰国後は自分の意見を大切にす、発信する生き方をするようになった。また、多様な人種、ジェ

ンダー、年齢の人があたりまえに共生していたチェコにふれて、自分も人の生き方に寛容になった。日本も徐々に変わりつつあるが、特に教育活動においてはまだまだタブーもあると感じる。それを取り払うような生き方をしていると思う。宿題を出すとき、共に活動するとき、保護者対応等、日々の細かなことでも、常に海外での経験にもとづく視点で考えるようにしている。日本しか知らない子どもたちに外国への目を開かせるのが教師の役目だと思うので、実体験に基づいてそれが実践できるチャンスをもらえたのだと思っている。

今後、地域に多いブラジル人や姉妹都市からきている在住外国人と一緒に何かをやってみたい、SDGsにある「世界を知る」とつなげて、自分たちの地域と海外をつなげる活動など、やりたいことはたくさんある。

帰国後3年経つが、常に頭と心の中は海外にいるような気がする。それだけ自分が自分らしくいられたのだと思う。日本では得られなかった充足感が残っている。その感覚を抑え込まずに日本でも生かすことができれば、もっと柔軟にのびのびと生きられ、また、外国を知る教師としてもっと教育活動を広げていけるのではないかとと思っている。